

文化人類学者と共に考える羅生門的状况——固着した視点からの脱却に向けて

伊藤泰信

北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）先端科学技術研究科 教授

近年、文化人類学およびその方法であるエスノグラフィを医療分野に活用する動きが活発になっています。特に 2017 年に医学教育モデル・コア・カリキュラムに文化人類学が導入されて以降、その視点や方法が医学教育に取り入れられるようになり、文化人類学会や医学教育学会では専門の委員会も設置され、教科書も作られています。

文化人類学の鍵概念である「異質馴化」「馴質異化」について簡単に紹介します。文化人類学者は、他者の言動を外側から判断するのではなく、内側から理解しようと努めます。他者の論理を、理解可能な形で説明することを「異質馴化（いしつじゅんか）」と呼びます。「彼／彼女らが行っていることや言っていることは、一見奇妙にも思えるけれど、彼／彼女らの生活の文脈のなかで捉えれば、じつは理にかなっている」というよう理解の仕方です。患者（他者）理解において、たとえば、指示通りに服薬しない患者を、単にコンプライアンス不良と片付けるのではなく「なぜそのような行動をとるのか？どういう論理があるのか？」と、患者の論理を内側から理解しようと努めることが相当します。

他方で、文化人類学では、自明視している自分たちの文化や価値観を、他者の視点や論理を通して“見慣れないもの”として捉え直します。これを「馴質異化（じゅんしついか）」と呼びます（「馴質」：馴染み深い、“当たり前”と感じていること、「異化」：それをいったん“異なるもの”として捉え直すこと）。「自分たちが当然と考えてきた医療者の価値観や行動様式も、患者（他者）の視点から見直すことで、異なる捉え方が可能になる」ということです。

馴質異化は、無意識に抱いている私たちの“固着した視点からの脱却”を意味します。つまり、「自分たちの“当たり前”が唯一の正解ではない」と認識することで、現状を“相対化”し、批判的に捉える視点を喚起します。相対化とは、ある1つの基準だけが絶対的に正しいとするのではなく、「正しさ」や「答え」は多様であり、現状の医師の価値観もその中の1つに過ぎないと捉えることです（これを文化相対主義と呼びます）。

このような文化人類学的な視点は、へき地や地域医療に従事する医師の経験とも重なる部分があるかもしれません。医師は、見知らぬ土地に赴き、その地域の文化を学びながら、住民（患者）を内側から理解しようと試行錯誤を重ねているのではないのでしょうか。

今回は、文化人類学およびその方法であるエスノグラフィを紹介しながら、へき地・地域医療の実践における視点の転換について議論の糸口が提供できればと考えています。

【略歴】

- 2001 年 九州大学 大学院比較社会文化研究科 博士課程 単位修得
- 2005 年 博士号取得（九州大学 博士（比較社会文化））
- 2005 年 北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）知識科学研究科 助教授/准教授
- 2011 年 英国ロンドン大学 UCL 人類学部 客員研究員
- 2013 年 米国パロアルト研究所（PARC）訪問研究員
- 2021 年 北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）先端科学技術研究科 教授 【現職】
- 2021 年 藤田医科大学 医学部 客員教授 【現職】
- 2023 年 日本学術会議 会員（第一部） 【現職】
- 2025 年 金沢大学 医薬保健学域医学類 基礎医学教授（学外） 【現職】